

I 結核発生動向の概要

結核発生動向の概要

大阪市の全結核罹患率（人口10万対）は、1999（平成11）年107.7から2021（令和3）年18.6まで減少した。一方全国の罹患率は1999（平成11）年34.6から2021（令和3）年9.2まで減少していた。大阪市の喀痰塗抹陽性肺結核罹患率は、1999（平成11）年34.7から2021（令和3）年7.4まで減少し、全国の罹患率は1999（平成11）年11.4から2021（令和3）年3.3まで減少していた。全結核罹患率・喀痰塗抹陽性肺結核罹患率ともに、全国と比べ大阪市の方が減少率は大きかったが、それぞれ2.0倍、2.2倍と依然として高い状況が続いている。

結核死亡率（人口10万対）をみると、全国では1999（平成11）年2.3から、2021（令和3）年1.5へ減少しているが、2002年以降はほぼ横ばいで推移している。一方大阪市では1999年（平成11）年6.9から年々減少していたが2010（平成22）年増加に転じた。その後、2013（平成25）年4.8をピークに再び減少傾向となり、2015（平成27）年は3.4であった。その後2016（平成28）年からは再び増加に転じ、2017（平成29）年4.6をピークに2021（令和3）年は3.2まで減少した。高齢者結核の割合が高いことが原因の一つと考えられるが、変動が大きく今後の動向をみていく必要がある。

大阪市では2016（平成28）年から、70歳以上の結核患者の占める割合が52.8%になり新登録結核患者全体の半分を超えた。2020（令和2）年は57.1%とさらに高齢者の占める割合が増加するも、2021（令和3）年は54.7%であった。大阪市および全国ともに、結核患者の高齢化が進んでいる。

年齢階級別罹患率をみると、大阪市の2021（令和3）年は、60歳代、70歳代の罹患率はそれぞれ26.0、36.7であり、80歳以上の罹患率が67.3と最も高かった。全国と比較すると、特に60歳代、70歳代の罹患率が高く、それぞれ3.7倍と2.7倍であった。

大阪市24区の罹患率をみると、2011（平成23）年に西成区においてはじめて200を下回り、2021（令和3）年は79.7まで減少しているが依然として24区で最も罹患率が高かった。結核健診による患者の早期発見と確実な治療、適切な接触者健診の実施とLTBI治療の推進が重要である。

外国出生結核患者数は、全国的に増加傾向にあるが、大阪市では2021（令和3）年は48人で、前年の49人と大きく変化はなかった。新登録結核患者のうち外国出生結核患者の占める割合は全国的に増加傾向にあり、大阪市では2021（令和3）年は9.4%で前年の8.5%から増加した。20歳代の結核患者においては特に外国出生結核患者の占める割合が高く、大阪市では2014（平成26）年23.1%から、年々増加傾向にある。2018（平成30）年は大阪市72.9%、全国70.4%と、はじめて大阪市が全国を上回ったが、2021（令和3）年は大阪市69.6%、全国72.6%と2019年以降は全国を下回っている。全国的に20歳代の結核患者の過半数を外国生まれが占める状況にあり、日本語学校健診による患者の早期発見や医療通訳派遣事業などの患者支援が引き続き重要である。

